九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第17回日本古典籍講習会を受講して

西，真里恵
九州大学附属図書館利用者サービス課参考調査係

https://doi.org/10.15017/4067302

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2019/2020, pp.86-94, 2020-07. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

報告

第 17 回日本古典籍講習会を受講して

西 真里恵†

<抄録>
人間文化研究機構国文学研究資料館と国立国会図書館が主催する日本古典籍講習会の研修内容を紹介する.
<キーワード> 人間文化研究機構国文学研究資料館，国文研，国立国会図書館，NDL，日本古典籍講習会，古典籍，和古書，書誌学，資料保存

A Report on the 17th Workshop on Early Japanese Books for Librarians

NISHI Marie

1. はじめに

人間文化研究機構国文学研究資料館（以下，国文研）と国立国会図書館（以下，NDL）では年に 1 回，日本古典籍の整理・目録化を促進し，広く活用されるよう環境の整備を図ることを目的に，日本古典籍講習会を開催している．講習会では各所蔵機関の図書館員等を対象に，書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目標に研修が行われる．

九州大学附属図書館（以下，本学）において，筆者は人文社会科学系資料を所蔵する中央図書館に所属し，相互利用業務と参考調査業務，貴重資料の撮影・掲載に関する許可業務を担当している．日本古典籍の目録化に直接関わるわけではないが，利用者に対し貴重資料へのアクセスをナビゲーションする立場にあり，参考調査業務で資料の書誌事項を尋ねられることも多く，書誌学的な知識を身につける必要性を感じていた．本学研究開発室の「コンテンツの形成および保存に関する調査研究」に属していることもあり，受講を希望したところ，幸いにも学内で推薦をいただき受講の機会を得た．

当報告書では，国文研の許諾をいただき，令和元年度開催の講習会の内容について所感を交えて紹介する．

なお，当日の講義資料は国文研の「国文学研究資料館学術情報リポジトリ」にて公開されている[1]ため，より詳細な内容を知りたい方にはぜひそちらをご覧いただきたい．

2. 2019 年度講習会開催概要

第 17 回 日本古典籍講習会（2019 年度）は 2019 年 7 月 2 日（火）～5 日（金）の日程で，例年通り最初の 3 日間は国文研，最終日のみ NDL の東京本館にて開催された．

受講者 33 名のうち大半が大学図書館の職員であったが，中には公共図書館や博物館等に所属の方もおられた．国内各地から人が集まっているものの，九州地区からの参加は私のみだったこともあり，普段の業務では滅多に関わりをもつことのない方と交流をもつことができる貴重な機会となった．

3. 受講内容紹介

3.1. 1 日目

3.1.1. 【講義 1】はじめての古典籍（国文学研究資料館　神作研一研究主幹）

最初の講義では総論として，「古典籍」，「書誌学」という言葉の定義に始まり，写本・刊本それぞれの特性や，各種目録の比較，書誌記述の方法などを講義いただいた．

自分の中で古典籍とは，書誌学とは，という基本的な定義を曖昧にとらえたままに講習会に臨んでいたため，4 日間の講義の導入として基礎的な知識を整理していただけたことにより，安心してこの後の講義に臨むことができた．

この講義の中では写本はその中身と系統が重要視されるのに対し，刊本は資料の大きさで本の格や中身がある程度分類可能であり，外見が最重要である，との解説をいただいたことが印象深い．この考え方はこの後の多くの講義でも言及され，書誌学を学ぶうえでの前提となるもののようであった．

「写本の系統を考える上で，古い物語は藤原定家の手を通っているものが多いが，その定家は改作家である」「丹緑本はその人気に乗じて，近代の書店が上から色を塗っているような例もあり，色の劣化具合から見分ける」など，各項に挟まれるエピソードは面白くもためになり，この後の講義で詳しく学ぶ，資料の成立

† にし まりえ　九州大学附属図書館利用者サービス課参考調査係　（〒819-0395 福岡市西区元岡 744）　E-mail: nishi.marie.551@m.kyushu-u.ac.jp

過程や出版文化史への興味をそそられるものであった.

3.1.2. 【講義 2】くずし字について（国文学研究資料館　岡田貴憲特任助教）

この講義ではくずし字について特徴や読み方等の概説を学んだのち，配布された変体仮名一覧表を参考にしながら，実際に読解練習を行った.

くずし字解読の練習には，①変体仮名を覚える，②辞書をひかず読む，③コレクションの性質に合わせて教材を選ぶ，④忘れないように継続的に読む，の 4 点がポイントとなるという.

講義ではくずし字の解読に必要となる辞典類・教材を多数ご紹介いただいたが，特に辞典類について「平仮名特化」「字の外見から引くもので利便性が高い」「研究者が広く使用するもので怖いもの無し」「御座候文等の古文書向き」等それぞれの特徴について大変実用的な解説があり，参考になった.

読解練習においてはくずし字の掲載されている明治期の教科書の一部や，目録の採録に特に重要となる，資料序文中の時世を表わす箇所等，時代背景が窺われるものや，目録の採録の練習になるものなどが用いられ，ただ読解の練習をするのみでなく，資料そのものから学べる部分が多々あった．このときに練習したことが 2 日目の目録作成実習の際にも役立ったように思う.

個人的にはくずし字の読解については多少の経験があり，少しは読めるつもりでいたが，実際に例題を読み下した際，一字読み違うだけでそこに引きずられ，その後の文意の予測をつけられずに連なって読み違えてしまうことが何度かあった．頻出の平仮名でも字母を見て即座には判断できなくなっているものも多く，練習のコツの 4 点目にあたる「忘れないように継続的に読む」ことの重要性が身に染みた.

3.1.3. 【講義 3】写本について― 奥書・識語を中心に（国文学研究資料館　海野圭介教授）

講義 1, 2 の流れを受け, 写本の歴史や板本との関係, 種類等の概説の後，資料の画像を交えて奥書・識語の判読時のポイント等を講義いただいた.

モノとしての写本には図書館で取り扱う書物としての価値は勿論，時には歴史資料となったり，筆跡やその装丁から美術資料として取り扱われるなど，その見方によって多面的な価値を持つというお話が印象深い.

講義 1 でも概説されたが，文学研究上の観点では，写本の本文が流動してゆく特性から，諸本を系統立てること，そして写本がその系統のどこに位置付けられるのかを見極めることが重視される．資料の書写年代や成立事情などを本文末尾等に書き記す奥書や識語はその判断をするうえで重要となるが，書写前の親本にあったものがそのまま転記された「本奥書」のほか，書写者が資料を書写した際や校合した際に書き記す「書写奥書」「校合奥書」，また架空の成立事情等を書き記す「偽奥書」等もあり，現物の状態や本文研究に基づき慎重に判断する必要がある.

参考調査業務において，時折資料の成立年代等を問われることがあるが，文末にある表記等に安易に飛びつくのでなく，一旦立ち止まってその奥書を信頼してよいものか，よく検討する必要があると感じた.

3.1.4. 【講義 4】板本について― 刊記・奥付を中心に（国文学研究資料館　木越俊介准教授）

ここでは，江戸時代における板本の目録採録に不可欠となる刊記・奥付について，①記載年月日の読み取り方，②複数の本屋が記されている場合の考え方，③同じ内容の本で刊記・奥付が異なる場合の検討の仕方の 3 点に重点を置いて，当時の出版文化を交えて解説頂いた.

まず①を考えるにあたり，整板本において「刊」は版木が完成し出版される時点を,「印」はその板本が実際に印刷された時点を指すことが前提となる．刊記はその字のとおり「刊」に関する情報を記したものであり，記述されている年月日も刊年を表わしている.

基本的に刊記から板本がいつ印刷されたのか確認できることは稀であり，同一の資料と版面等を比較することにより相対的に早印か後印かを見極めるしかないという.

②のように，資料の刊記に複数の本屋の名前が列記されている場合があるが，これはその資料が複数の本屋の共同出資により発行されたものであることを示す. 当時こうした例は多いが，書肆それぞれの関わりの度合いには差があり，刊記・奥付のみからは読み取れないこともある.

実際の刊記において左の方にあるものが主版元である場合が多いが，例外もあり，目録上は何らかのルールに則って採録するほかない．版元名の付近に朱印が押してあるようなものは，その印が主版元を示す場合があるが,「その本を刷った店」を指す可能性もあるといい，判断が難しい.

③の前提として，当時正式な手続きを経て書物を出版すると，出版した本屋には権利が生じ，原則その本屋に出版の権利が属することとなっていた．こうした権利を板株と呼ぶが，この板株は売買（求版）され，版木とともに書肆間を移動する.

板株の推移について，刊記に求版の旨が明記されている場合は資料現物からも判断がしやすいが，そうでないものも多い．刊記の中の細かな字形の違いから類推できる場合もあるというが，物によっては判断が難

しそうに思う．他にも日本古典籍総合目録データベースに登録されている画像や，既存書誌の情報を手掛かりとして紹介いただいた．

ただ目の前の資料のみを見るのでなく，他の資料と比較することにより，その資料に対する判断材料や見え方が広がってゆくのは面白い．講義 3 で「写本は美術品になりうるのに対し，板本は出版文化史の資料になりうる」とお話があったとおり，こうした板本の書誌を読み解くのには，その背景となる出版文化にまつわる知識が欠かせないようだ．

3.1.5. 【講義 5】蔵書印について(慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫　堀川貴司教授)

書物はその内容，本そのものの形態，その本の受容史の 3 要素で成り立っている．うち 3 点目の受容史の検討に重要な意味を持つのが，蔵書印や資料への書き入れである．ここでは，それらを調べる意義や，大陸からの印の受容史，印の読み方や他の印との見分け方等について講義いただいた．

蔵書印はその印字から旧蔵者を特定するのみならず，その旧蔵者から書物の成立年の下限を推定したり，日本古典籍でなくとも，漢籍・朝鮮本・洋書に押印されている印から日本への受容経緯を推定したり，逆に海外機関の所蔵する日本古典籍についても蔵書印を確認することによりその資料がいつの年代まで日本にあったのか特定することもできるなど，得られる情報は意外にも多い．

蔵書印は一般的に資料の 1 丁表の右下側のほうに押印する場合が多いが，一つの資料に複数の蔵書印が押印されている場合，先に押されたものを避けるように押印するため，下から上へ新しくなっていくという．

人物によっては蔵書の種類により蔵書印の色を使い分けるとのお話があったが，資料がどのように受容されているか，という点のみならず，その旧蔵者がそれぞれの書物をどのようにとらえ，分類していたか，という観点でも研究調査に役立ちそうで面白い．

資料頁上の色に関して，参考調査業務においては複写を前提として，依頼者に書誌情報と併せて訓点や傍線，絵図等の色合いを伝達することがあるが，古典籍資料で「朱色」と呼びづらいような鮮やかな赤色で書き入れや押印してあると言葉選びに迷いがあった．印について，目録上はまとめて「朱」としてよいとの太鼓判に少し安心した．

蔵書印はくずし字以上に解読が難しく，習得には図版等を見て見慣れておくことが必要だと感じた．講義中で紹介された参考書類は当館で所蔵しているものも多く，時間をとって勉強したいと思う．

3.1.6. 【講義 6】絵入り本について（国文学研究資料館　小林健二名誉教授）

ここでは絵入り本の歴史に始まり，室町末期から江戸前期にかけて作成された「奈良絵本」と呼ばれる絵入り本写本について，その時代背景や制作過程，名称の由来等の概観的なお話や，具体的に資料の画像や現物をみながら，特徴やそこから読み取れることを解説いただいた．

これまでの講義でも本の大きさによって本の格や中身が分類可能, とのお話があったが, その例に漏れず, 奈良絵本においては絵巻，大本，半紙本の形態をとるものは貴族や豪商の特注品であり，箔押しや金泥がふんだんに使用される豪華絢爛なものであるのに対し，横本の場合は中流以上の庶民に向けられた量産寄りの普及版で，金箔は散らされる程度のものとなる．

それぞれの資料紹介に際して，資料に施された意匠を解説していただくのみならず，物語のストーリーや文学作品としての背景等をご紹介いただくのも楽しい．

講義終盤には講義中に紹介された奈良本の数々を直に見せていただき, 現物のきらびやかさに圧倒された．

これらの資料は WEB 上にも画像が公開されているが，金・銀が用いられているような資料はその光沢や色味が画面上では再現できない場合があり，画像と現物では少々印象が異なるように感じた．

3.2. 2 日目

3.2.1. 【講義 7】装訂・料紙について（国文学研究資料館　落合博志教授）

ここでは日本古典籍の装丁・料紙について，世界の中で見た日本古典籍の装丁の特色，各種装丁の特徴等について，実物を見ながら解説いただいたのち，料紙の種類を学び，実際に現物を触れさせていただいた．

現代において装丁は表紙のデザインなどを含む意味で使用されるが，古典籍においては紙をどのように使って一つの本を作るか，その造りのことを指す．

日本の書物は世界の書物のなかでも装丁の種類が多様であり，また古くからの装丁の様式が新しい様式に淘汰されることなく，後代まで長く継承されたことが大きな特徴とされる．より利便性の高い様式が生まれるにつれて古いものが廃れ，移り変わっていく例が多いが，日本においては古い様式のものも格式高いものとして尊重され，用いられ続ける．例えば，袋綴じの板本が流通するようになった近世においても，秘伝書のような一覧しにくく不便であることが効果を発揮するような場面で，巻子本が用いられ続けたという話が興味深い．

そうした装丁のあり方そのものが日本の古典籍にまつわるひとつの文化であるとのお話に興味をそそられた．

料紙については，資料に用いられる紙の質に種類があるということ，それぞれの紙がどういったものに使われているかということは文献等を読んで知識として把握していたが，実際にそれらが種々眼前に並び，その手触りや重みを比較する体験は非常に貴重であった．

講義 6 の奈良絵本とも共通することだが，資料現物を手にとり，当時の人も感じていたであろう，資料の質感や重みを直接確認することにより得られる情報もあるのだ，ということを実感した．

3.2.2.【講義 8】表紙の文様について（国文学研究資料館　齋藤真麻理研究主幹）

この講義では古典籍の表紙に着目し，表紙の種別や表紙に着目する意義，紋様を表わす際の技法等を学んだ後，ふんだんな資料画像と併せて紋様の種類をさまざまに解説していただき，実際に文様を見て名称を類推する演習を行った．

目録の書誌事項として文様が記述されることはあまりないが，表紙のデザインは古典籍の製作者の美意識の表れであり，資料の文化背景や，時代，ジャンル，内容とも関わるものである．例えば唐草は仏教色が強い，雨竜は古い板本に多く見られる等，資料の性質や時代背景とリンクする文様も多い．また，物語の内容に合わせて季節感のある文様を用いたり，登場人物を連想させる植物の文様を用いるなど，作品の製作者の創意がうかがい知れるものもある．

普段の業務においては，講義 1 やこの後の講義 9 に紹介されるような，資料の大きさ・版型によって内容を判断することは意識していたが，文様についてはその美しさに目を奪われることはあっても，その意味するところに意識が向けたことがあまりなかった．講義では見覚えのある文様もいくつか紹介され，それぞれの文様にどのような名称があり，どのような背景があるか認識したことで，やはり，と納得できる点や，新たな一面を発見できることがあった．ただ図像を目で楽しむだけでなく，本文を読むのとは別の視点から，その資料の背景や魅力を感じられる，文様の奥深さに心惹かれる講義であった．

3.2.3.【展示見学】通常展示「和書のさまざま」

講習会期間中は国文研の展示室にて行われている通常展示「和書のさまざま」を昼休み等に自由に見学できたが，この 2 日目には班を分けて，昼休憩の前後に講師の先生方による展示解説の時間を設けていただいた．

この展示は「和書の形態と素材」「和書の構成要素」「さまざまな本」の 3 セクションで構成されており，資料現物をもとにさまざまな装訂や書型，各時代の特色ある資料，書名や本文，書入，等の構成要素が紹介されている．

ここまでの講義で紹介された各種資料が一同に並んでおり，復習になるとともに，資料を目の前に解説していただき知識を補強できる時間であった．

また，この後の講義 9 で詳細に解説されるような各規格の書籍も展示されており，ここで見た各資料のことをイメージしながら受講することができたため，理解の助けになった．

このとき資料として展示会の図録を配布いただいたが，国文研の「国文学研究資料館学術情報リポジトリ」でも同図録の電子版が公開されている．[2]

3.2.4.【講義 9】江戸の出版文化（国文学研究資料館　入口敦志教授）

展示見学で解説された内容を踏まえつつ，江戸以前から近世初期にかけての出版文化史を概観し，特に江戸時代の出版物の大きな特徴である書型と内容との関連性について詳しく解説いただいた．

身分制社会の中にあるすべての物には身分があり，書物においても例外でないという．書型が大きくなるほど格式の高いものとなるのと同じく，文字であれば平仮名，片仮名，漢字の順，刊写の別であれば整板本，活字本，写本の順で格式が高くなる．また，写本の中では袋綴，折本，巻子本と古い形態になるほど格式が高くなるのに対し，板本は装丁の作りよりも大きさが重視されるが，これは板本の多くを袋綴じのものが占めることが要因である．

江戸期の出版物はその身分の上で大きく「物の本」と「草紙」の二つに分けられる．物の本は伝統文芸や道徳・思想に関する格式高い書物であるのに対し，より通俗的・娯楽的で廉価な書物を称する．これらを書型に当てはめると，一般的に物の本は大本，草紙は半紙本以下の様式をとる．

このように書型が資料の格・内容と密接に関係するのが当時の出版物の大きな特徴であるが，デジタル画像ではサイズ感が伝わらず，一見するだけではそうした情報は読み取りづらい．そうした大きさや質感が直感的に把握できる点も現物にあたる利点の一つだと思われる．

3.2.5.【講義 10】幕末明治の出版文化（国文学研究資料館　山本和明教授）

ここでは近世後期から明治初期にかけての出版文化史について学び，それらが書物に与えた影響，またそうした資料に関する留意点等を講義いただいた．

この時期の書籍は，出版文化の隆盛や度重なる改革，それによる出版業のありかたの変動等による影響を受け，異本が多い．改変等が疑われる場合も多々あるため，目録を採録する際には正確で詳細な情報を心掛け

ることが重要である.

講義中では幕末明治の出版物を考える上で参照しうる出版年表や出版社名簿等のレファレンスツールを多数ご紹介いただいた．ほぼ WEB 上のコンテンツで締められているため,気軽にアクセスできてありがたい.触れたことのないツールも多く,少しずつ使ってみて,参考調査業務にも生かしたい.

3.2.6. 国文学研究資料館閲覧室と書庫の見学（国文学研究資料館管理部 学術情報課図書情報係 小島歩係長）

国文研の閲覧室と，一般は立入ることのできない書庫を見学させていただいた.

書庫内の空調は夏季なども除湿機を稼働するのみで,特に温度調整は行っていないとのことで，除湿のみで一定の温度を保つことができる点に福岡との気候の違いを感じる．和古書が配架されている書架の棚板には中性紙のボードが敷いてあるところが特徴的だった.一般書庫の書架は側面・天板に網目状の板が使用されており，空気滞留を防ぐ工夫が感じられる．文書類も中性紙製の文書箱に収められ，整然と並んでいたのが印象的だった.

資料受入時の虫害対策として，人や資料に悪影響を与える恐れのある燻蒸処理等は行っておらず，館内の殺虫部屋で低酸素処理を行っているとうかがった．処理にあたっては文化財用の窒素ガス発生装置とモルデナイベの 2 種を使用しているとのことで，両者とも見学させていただいた.

窒素ガス発生装置のほうは初見であったが，かなり大型の袋でブックトラック 3 台ほどを包み，まとめて処理している様子のインパクトが大きかった．大量の資料の一括処理や大振りの資料を処理するにも活躍するそうで，国文研のように貴重な資料を大量に受け入れする機関でも，外注せずに資料を守っていくのに有用だと感じた.

図 1 窒素ガス発生装置

3.3. 3 日目

3.3.1. 【講義 11】国文学研究資料館 和古書目録データベースの作成（国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター事務室 飯沼邦恵副室長，国文学研究資料館学術情報課古典資料目録係 堀野和子係長，田中梓氏）

ここでは国文研で所蔵している和古書の目録データベースである「館蔵和古書目録データベース」[3]と，日本の古典籍の書誌・所在についてのデータを提供する目録データベースである「日本古典籍総合目録データベース」[4]について，それぞれの構造や成り立ち，両者の関係について学び，後者について検索時のポイントや検索画面・書誌画面等の見方を具体的にレクチャーしていただいた後，和古書目録の目録記述について学んだ.

普段のレファレンス業務でも古典籍総合目録データベースを利用することが多々あるが，今回改めてその構造や特色を学ぶことができ，今後の業務での検索に生かせる内容であった．データの構造をふまえ,「書誌検索より著作検索のほうが漏れが少ない」「注記に含まれる情報が少なくないので全項目を対象に指定して検索すると漏れを減らせる」等，検索に関する注意事項を具体的にご教示いただけたのがありがたい.

3.3.2. 【実習 1】国文学研究資料館 和古書目録の作成（国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター事務室 飯沼邦恵副室長，国文学研究資料館学術情報課古典資料目録係 堀野和子係長，国文学研究資料館管理部 学術情報課図書情報係 小島歩係長）

講義 11 で学んだことや配布された書誌レコード作成要領を参考に，実際に国文研の所蔵資料を手にとって目録の作成を行った．すでに登録済みの資料を用いて作業を行い，目録作成後は該当資料をデータベースから検索し，既存の書誌と見比べながら答え合わせをする.普段は NACSIS の記述項目を見慣れているため,少し異なる規則のもとで目録を採録するのは新鮮であった.

作業にあたり，予め A4 サイズの用紙に各書型の実寸大の長方形が描かれた「書型スケール」が配布されており，シンプルながら一目で資料の書型を測定することができ，大変役立った.

この 3 日間を通じ各講義において，詳細で丁寧な書誌記述がいかに研究に役立つか，ということを学んできたこともあり，できるだけ多くの情報を記述しようと息巻いたが，実際に資料を前にすると，刊記に読みとれない箇所があったり，資料に添えてある袋についてどう記述すればよいか，どこまで記述すればよいか悩んだり，要領通りにいかないことも多々あり，資料に関する知識を日頃から磨いておく必要を感じた.

3.3.3. 【講義 12】日本語の歴史的典籍のデータベースについて（国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター事務室データベース第一係松原恵係長）

国文研で行われている「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（略：歴史的典籍 NW 事業）」[5]について，事業概要や事業により構築されている「新日本古典籍総合データベース」[6]の特色，事業で公開しているオープンデータセット，事業における古典籍のデジタル化作業の流れについて紹介いただいた．

この事業は国文研が中心となって国内外の大学等と連携して日本語の歴史的典籍約 30 万点を画像データ化し，既存の書誌情報データベースと統合させた「新日本古典籍総合データベース」を作り，その画像を用いて国際的な共同研究のネットワークを構築するものであり，平成 26（2014）年度から令和 5（ 2023 ）年度の 10 年間を予定して実施されている．

本学も国内に 20 カ所ある拠点大学のひとつとして参画しており，近年は年間 1,000 件規模の資料をデジタル化させていただいている．

普段相互利用業務において，自館の貴重資料の撮影希望を受ける立場にあるが，依頼を受けたものが案外 NW 事業によりすでに電子化されている場合もあり，遠隔地からの訪問が不要になったと感謝されることが多々ある．資料が貴重資料に指定されている場合は，利用者に複写サービスを提供するにも業者を通すことになるため高額となることが多く，画像を無料で閲覧できることは「複製が入手できれば良い」程度の需要に対してメリットが大きい．また，遠隔地からでも資料の内容が確認でき，現物の閲覧が必要な資料か否か事前に確認できることは，無駄をなくし，利用者にとっても図書館にとっても有益であるように思う．

最近では一般の方から「新日本古典籍総合データベース」に公開している画像について利用の問合せを受けることもあり，研究者以外の一般の層にも，当該データベースが少しずつ普及していることを感じる．

個人的には過去にNW事業による画像撮影のための丁数数えのアルバイトに参加していたことがあり，大量の古典籍に触れつつ資料の扱いを学び，資料の内容を垣間見たことが，古典籍の取り扱いを身に着ける上での基礎となった実感がある．現在の担当業務とは関わらないが，思い入れのあるプロジェクトであり，やっと現地で全容についてお話を伺うことができたことを嬉しく思う．

3.4. 4 日目

3.4.1. 【講義 13】国立国会図書館における 和古書書誌データ作成（国立国会図書館利用者サービス部人文課古典籍係　沢﨑京子様）

NDL における古典籍資料の収蔵状況や資料収集の歴史，目録作成およびデータベース化の状況，和古書目録記述規則について学んだ．

NDL での和古書書誌データの作成にあたっては，日本目録規則（NCR）を参考に，和古書に特化した独自の入力マニュアル「和古書適用細則」 [7]を作成し，これに基づき和古書の目録採録を行っている．

現在「国立国会図書館オンライン」 [8]上で使用されている和古書の書誌データは①「日本目録規則 1952 年版」「日本目録規則 1987 年版改定版」を参考にした和古書入力マニュアルをもとに作成したもの（1948 年～2003 年の受入資料），②国文研の「国書基本データベース」（現在の「日本古典籍総合目録データベース」）から NDL 所蔵資料の著作データを抽出し，追記・訂正を加える形で作成したもの（～1948 年受入資料），③直近の「日本目録規則 1987 年版　改定 2 版・3 版」に準拠した和古書適用細則をもとに作成したもの（2003 年以降の受入資料）の 3 種に分けられる．うち②は国文研のデータを元としており，国文研のデータから書名，著者名をほぼそのまま使用しているため，記述の正確性に欠けるという特徴がある．

「和古書適用細則」の適用範囲は「本文が日本語で書かれた印刷資料又は書写資料のうち，慶応 4 年までに刊行又は書写されたもの」と定義されているが，刊行が慶応 4 年までのものであっても，明治元年以降の後印であることが明らかな場合は和古書としては扱わず，近代和書とみなす．国文研の「日本古典籍書誌レコード作成要領」では同様のものも古典籍としていたことと比較すると，国文研は近世以前の古典籍を，NDL は近代以降の和図書を広く定義している．

他にも，NDL では本タイトルの一部として巻数を付すのに対し国文研では巻次は別フィールドとする，NDL では 3 以上の出版者が確認できる場合は主な 1 つを記録して[ほか○名]と補記するのに対し国文研は省力せず全出版者を記録する，等の差異があり面白い．

業務上，国立国会図書館オンラインや国立国会図書館デジタルコレクション[9]を書誌検索に利用したり，利用者に案内したりすることも多々あるため，この機に NDL の蔵書の構成やデータベースの構成経緯を改めて学べたことは担当業務の上でも有意義であった．

「国立国会図書館オンライン」の検索ヒントとして「和古書は国書総目録の分類，漢籍は四部分類から検索できる」「詳細検索画面で資料種別「和古書・漢籍を選び，テキストボックスに検索ワードを入力すると注記欄も検索できる」等，実用的な検索テクニックも紹

介していただいたことも大変参考になった.

3.4.2. 【講義 14】国立国会図書館における 古典籍資料の電子化（国立国会図書館利用者サービス部人文課古典籍係　石田暁子様）

NDL における古典籍資料のデジタル化について，その経緯や目的・根拠規定，電子化の対象資料選定からデータ公開に至るまでの工程まで，詳細にご紹介いただいた.

NDL の古典籍資料室の所管資料（和古書のほか，漢籍，西洋古典籍，近代の新聞・雑誌のうち準貴重書に当たるもの等も含まれる）はおよそ 28 万冊あるうち，三分の一強にあたる約 10 万冊がデジタル化され，国立国会図書館デジタルコレクションにて提供されている. 毎年新規に業者委託によるデジタル化が進められており，7～9 月の資料選定にはじまり翌 3 月のデータ公開まで，年間単位のスケジュールで進められる.

デジタル化する資料の優先順位は「資料デジタル化実施計画 2016-2020」に定められており，優先度の高いものから順に貴重書・準貴重書等，それ以外の古典籍資料，西洋古典籍，その他電子展示会で取り上げる資料，とされている．他にも文庫資料や請求記号の近いものはできる限りまとめて対象にする，利用頻度や貴重度の高いものは優先して撮影する，資料保存の観点から現物の利用によりダメージを受けることが考えられるものは優先して撮影する等の要素に留意して選定されているという.

年間約 3 万コマ分をの撮影を外部に委託するなかで，あらかじめ対象資料をリスト化し，コマ数や挟み込み資料の有無を確認する，委託にあたり作業員には一定の資格を求める，入札説明会ではそうした資料現物を見せつつ説明する，納品から 10 日以内に検収を済ませる必要があるため職員の方が目視で 1 点ずつ点検する等，各工程それぞれに画像の品質保持や原資料の保護に心を砕かれているさまをうかがい，普段よく利用する NDL デジタルの画像が，大変に細やかな作業を経て公開されていることを改めて実感した.

3.4.3. 【講義 15】図書館における資料保存（国立国会図書館収集書誌部資料保存課和装本保存係 宇野理恵子係長）

図書館における資料保存の基本的な考え方，資料の劣化・破損要因と劣化したものの手当について NDL の実例を交えて講義いただいた.

図書館が蔵書を基盤としてサービスを提供している以上，蔵書をできるだけ長く利用できるよう保っていくことは図書館業務の重要な柱の一つである．そのために図書館ができることとして，資料の劣化に対する「予防」と劣化してしまった資料の「手当」の 2 点が考えられる.

手当の必要な資料を選別し，手段を講じるには労力がかかるため，そうなる前に予防的な対策に重点を置くことが効果的である.

ただ，予防と一口に言っても劣化・破損の外的要因としては災害やカビ・虫・光など，内的要因としては酸性化・劣化・壊れ等，人的要因としては不適切な取扱いや排架･複写など，対策すべき要因は多岐に渡る.

個人レベルや単独部署でできる対応には限りがあるため，地道な作業の継続と館内の広範囲に協力体制を築くことこそが肝要であるとの説明に共感した.

3.4.4. 【実習 2】四つ目綴じ・簡易帙の作製（国立国会図書館収集書誌部資料保存課和装本保存係 宇野理恵子係長，同青木留美子氏，国立国会図書館収集書誌部資料保存課洋装本保存係 正保五月氏）

ここでは，和装本の四つ目綴じの実習と，中性紙製の簡易帙の作成実習を行った.

四つ目綴じは何度か経験があったが，下綴じにこよりを使用するのは初めてであった. この下綴じにより，綴じ糸が切れても本紙が散逸しないというメリットがある．こよりをより上げるところから実習したが，力加減が難しく，上手くよることができなかった．糸による本綴じは説明書を見ながらであれば特につまずくことなく簡単に綴じることができた.

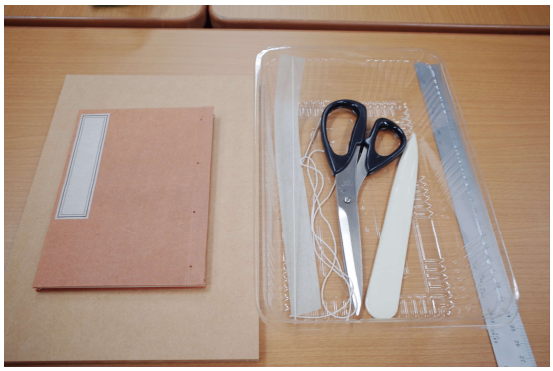

図 2　四つ目綴じの資材

図 3　こより綴じした資料

簡易帙は三康文化研究所附属三康図書館考案の紙製のものを作成した．この三康図書館方式は，一枚の紙を折る・切るだけの動作で作成でき，非常に手軽で現場でも使いやすいものだと感じた．

この帙を作成する際の注意事項として，紙の目を資料の縦辺の向きに合わせるよう指定されていた．紙の目を縦向きにすると立ちやすくなる性質を利用し，帙にしたときに比較的倒れづらくするためと聞き，細やかな工夫に感嘆した．

図 4　実習の合間に資料保存関係の資材が多数展示された

4. 受講しての所感

普段，自主的に関連図書等を読み，独学で書誌学的な知識を得ることはできても，古典籍を構成するありとあらゆる要素に関して，これほど網羅的に学べる機会はそうない．

講義を通じて研究者の皆様の目線から，目録に求める要素や古典籍を見る際のポイントをレクチャーしていただき，図書館として何に留意して資料を供すればよいか，ユーザーに提供する情報として一体どこを抑えておければ調査研究の助けになれるのか，自分の中に持っていた考えと答え合わせをすることもでき，少しずつだがその感覚を身に着けられたように思える．

また，各講義の最後には毎回講義で解説された資料の実物を見る時間を設けていただいたことにより，講義で学んだ物事をただの知識でなく，自分の実感として落とし込むことができた．

独学で学ぶ場合，例えば「丹表紙の色合いを直に見てみたい」「間合紙の実物に触れてみたい」と思った場合に，まずは自館資料を探すところから始めなければならず，その情報が目録や論文等に残っていなければもはや書架を探すほかなく，仮に見つかられたとしてもそれを知る人が周囲にいなければ，その資料が本当に求めていたものなのか確信する手立てがない．今回あらゆる資料を直に拝見させていただいた体験を通して，〇〇とはこういう見た目，質感，重みのもの，ということを身をもって知ることができた．この経験が今後古典籍に触れていくうえでの重要な指標となるように思う．

5. 受講を終えて

受講を終えて 1 年近く経つが，担当業務で日常的に目録検索や資料現物にあたることもあり，講習会で得た知識が日々役立っている．

業務中に古典籍資料を一目みたとき，講義で学んだ知識が思い起こされ，資料を見る際の解像度がぐっと上がった．受講前と比較しても，自信を持って資料を扱えることが増えたように思う．

例えば，参考調査業務において，資料の形態や書誌事項の照会を受けることがあるが，受講前には用語の理解に不安があり，質問に用いられている用語を調べるところから着手ことがあったが，その過程が不要となってきた．回答時にも，書誌事項を説明する語彙が増えたように思う．また，資料の撮影等に立ち会う際，利用者からの簡単な質問や書誌に関するアドバイスにも安心して受け答えできるようになった．

平時は業務で触れる機会のある資料に見識が偏るばかりだが，今回の講習会を機に，講義で学んだような資料が自館にないか探してみて，このような資料を持っていたのかと改めて驚くことが多く，自館の所蔵資料やその目録を見つめ直す良いきっかけともなった．

今回，講習会の主眼である目録作成業務にはほぼ関わっていないにも関わらず，受講させていただけたのは大変幸いであったが，資料の閲覧に関わる業務の担当者にとっても，資料の取扱いが身につき，資料を確認する目が養われる点で実に有意義であったと思う．

この講習会の 4 日間で学んだことは奥深い古典籍の世界の一端にすぎず，到底一朝一夕に全容を習得できるものではない．今後も講習会から得た知識を足掛かりに研鑽を積み，古典籍のあり方や自館の所蔵資料に対する理解を深めていきたいと思う．

参考文献

[1] 国文学研究資料館．日本古典籍講習会テキスト第 17 回．https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=355&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=21,(参照　2020-8-3)

[2] 国文学研究資料館．和書のさまざま――国文学研究資料館通常展示図録（2018 年版）――.2018 http://id.nii.ac.jp/1283/00003721/, (参照 2020-8-3)

[3] 国文学研究資料館，館蔵和古書目録データベース．http://base1.nijl.ac.jp/~wakosyo/, (参照 2020-8-3)

[4] 国文学研究資料館，日本古典籍総合目録データベース．http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/，(参照 2020-8-3)

[5] 国文学研究資料館，日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（略称：歴史的典籍NW事業）本事業について

https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/plans.html, (参照 2020-8-3)

[6] 国文学研究資料館, 新日本古典籍総合データベース. http://kotenseki.nijl.ac.jp/, (参照 2020-8-3).

[7] 国立国会図書館, 日本目録規則1987年版. 改訂3版, 和古書適用細則. 2012.
http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9484238/www.ndl.go.jp/jp/library/data/wakosho201201.pdf, (参照 2020-8-3)

[8] 国立国会図書館, 国立国会図書館オンライン https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/, (参照 2020-8-3)

[9] 国立国会図書館,国立国会図書館デジタルコレクション https://www.dl.ndl.go.jp/, (参照 2020-8-3)

[10] 国立国会図書館, 資料デジタル化実施計画 2016-2020. 2016.
https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/digitization/digitization_plan2016.pdf, (参照 2020-8-3)

本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて，本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際（CC BY-NC-ND 4.0）ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja